

「認知症を高次機能障害の仲間に入れてください」

国際医療福祉大学大学院修士課程 1年

看護師・河野礼子

柴本礼さま

ご主人が在宅療養中の中、ご講義頂きまして誠にありがとうございました。リアルなコウジさんともお話ができ、回復のご様子やお人柄がよく伝わり、仲の良いお二人の姿に癒されました。

私事ですが、2001年に心原性脳梗塞の主人の母を2週間、朝から晩まで付き添い、その後、在宅での看取りまで約20年、細々と、洪々と介護をしました。

愛するご主人であるコウジさんへの介護とは違い、一人っ子の夫を愛する、キャラクターが濃い目の義母への心穏やかではない介護は本当に恥ずかしい限りです。失語症ですが、的確に攻撃力ある厳しい言葉を投げかけ、いつ我慢の限界を超えて新聞に載るような事件を起こすかと、両親からも心配されておりました。

姑は脳が壊れてから生まれた孫の名前は覚えられず、「また子供産むの！私の介護できないじゃない！」と怒りました。介護を休息するために子どもを4人まで増やしました。

専従の御用聞きである嫁がかかわることで、失語症の言語リハになり大層回復が早まりました。その結果、心無いメッセージのパレードに傷つくことになりました。

けれど、距離を置くと認知症が進行し、生活に支障が出る。面倒を見ると回復することの繰り返し、「これって認知症改善のケア??」と、姑の生活をリハビリに置き換え、ダメ出しされている介護を確認するために、専業主婦がデイサービスを開業しました。

「ここはどこ？」と30分に一度同じ話を繰り返す利用者様でも、曜日を認識し施設や娘の名前を覚え、短期記憶も回復されました。

しかし、姑には、「よくやってるけど、プロじゃないのよ。」と言われ、ついに今年、看護師資格も取りました。

施設に通われている認知症の方々は姑同様、病識はありません。

診断されていても認知症ではない！と否定されます。2021年に病院で寝たきり認知症になった97歳親族と建て替えのため老健入所中に家族を忘れた姑を認知症から回復させ、家で看取りました。

NHK主催のユマニチュードのセミナーで、「姑を大切な人として接していない」という、直視できない現実気づき、心を入れ替え、女優に徹し、「大好きなお母さま」と接しました。すると、途端に、笑顔で憎まれ口を言われるようになりました。

高次機能障害で脳の変換ミスだと思い菩薩の心で接し、看取りの直前20年目初めて「ありがとう。プロの仕事ね」と、お褒めの言葉を頂戴しました。

礼様のご講義で、誰でも明日にでもなる可能性のある高次機能障害は、認知症と同じように思いました。

原因は複数多様で差異があり、オーダーメイドのケアが必要。理解があれば、お互い気持ちよく暮らせるところも同じように感じ、姑自身が自覚し「受容可能な診断名」でした。

私自身も交通事故の頭部外傷で死に直面したからこそ、死んだつもりで何事にも挑戦していますが、高次機能障害で脳のブレーキが利いていないせいかもしれません。

当事者の希望に寄り添った援助につなげるためには、本人の拒否する「認知症」と宣告するより、「高次機能障害として認知症の症状が出ている」とお伝えすることが安心感につながると現場では感じています。認知症を受け入れられない方への説明として脳の機能障害としてリハビリで血流改善を目指すことを提案しています。もし、よろしければ、ご意見をお伺いできますと幸いです。

「おばあちゃんは赤ちゃんになったんでしょ。私の妹になるこめに。」

介護ファーストで余裕なく実家に預けていた娘は、亡くなったベッドサイドで言いました。

その娘と「パパがこわれちゃった！」という絵本のお嬢様が重なりました。認知症改善のケアを伝えるため絵本を描くことも目標としていましたので、礼さまの絵本をお手本として当事者が笑顔になる接し方を伝えたいと思っています。絵本をお譲り頂けましたら、小学校での読み聞かせボランティアで読ませて頂きたいと思っております。

介護中はたどり着けませんが、この機会にコウジ村の一員として、よろしく願いいたします。

貴重なご講義をありがとうございました。